翼ある言葉

串田孫一

講談社

翼ある言葉

昭和33年6月20日　初版發行　©

著者　串田孫一

¥ 240

東京都文京區音羽町 3—19
發行所　野間省一

東京都文京區關口町 140
印刷所　慶昌堂印刷株式會社

發行所　東京都文京區音羽町 3—19　株式會社大日本雄辯會講談社
（振替 東京 3930）

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。（阪井製本）

目

次

ある日記 10
親切の押賣 12
心のかたむき 14
幸福の夕立 16
インクのしみ 18
鍵 20
美貌の藥罐 22
變裝症 24
町子の店 26
銀婚式 28
默つている嘘 30
戒めと手本 32
籠の鳥 34
ある演説 36

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

美しい笑い　38
夢と現實　40
姑という字　42
酔つぱらい　44
就職相談　46
故郷の花　48
空を怖がる人　50
屁理窟　52
崩壞感覺　54
我儘な期待　56
ある日の夕暮に　58
寫眞　60
五行の詩　62
老人の笑顔　64

働く姿 66
錄音機 68
さばさばした顏 70
嘲笑の大罪 72
ふだん着 74
叱る人 76
堂々たる言譯 78
片輪の足 80
心境一變 82
隆鼻術 84
豪華な生活 86
慰めの趣味 88
氣になる空箱 90
ままならぬ想い 92

にくき顔への微笑 94
凝つた言譯 96
有効な慰め 98
言いにくいこと 100
公園のボート 102
耳と顔つき 104
生活と心の幅 106
欠伸 108
眞理の訂正 110
ある宿の女中 112
枯れてゆく花 114
マスク 116
優等生 118
魚を燒くにおい 120

お酒と女性 122
言葉の効力 124
本さがし 126
ある偉さ 128
苦しみの眞相 130
合理的という神様 132
落葉 134
泉の如き悦び 136
かくれた豪膽さ 138
ピアノとヴァイオリン 140
歎きの救い主 142
老人の後悔 144
不要な過去 146
自由の影 148

變な交換 150
にこやかな顔 152
離婚の話 154
幸福そうな家 156
頑固者 158
文通 160
慰める潮時 162
木彫の小鳥 164
講師の表情 166
自己宣傳 168
あとがき 170

裝幀　著者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

翼ある言葉

消えてしまう言葉、忘れられてしまう言葉のなかから、翼をもつて、私たちのところまで飛んで來る言葉がある。それがとまると、私たちの心には明るい火がともる。

ある日記

人間よ。微笑と涙のあいだの振子よ。
バイロン

三月三日。まだつめたい風だ。その風をまともに受けて、わたしは走つた。だんだん早くなり、しまいに空へのぼつて行く感じ。土手の草のしよぼしよぼなのも、人のすむ家の屋根が三角なのも、自轉車に乘つている人の姿も、何もかも今日はおかしい。おかしくてたのしくて、私は困つてしまう。どうしてこんなにまで嬉しいのだろう。それを書くと消えてしまいそうだからやめる。わたしは鏡の前へ行つても、ひとりで笑つている自分の顏を見るのがきまりが惡い。

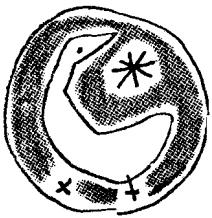
三月六日。夢の破れることは、こんなにも恐ろしいことだつたのかしら。夢なんぞを見て有頂天になつていたわたしは、世界で一番愚かなものだつたのだろうか。もう不安もない。むしろ不安でも殘つていてくれたら、わたしはわなわなふるえながら、

そこから希望を紡ぎ出す努力をおしまなかつたろう。殘つているのは、幾ら棄てようと思つても次から次へと湧いて來る溜息だけである。

三月十日。思いちがいをしていた淺はかな私は、風船のように天へ昇つて行くようだ。ひばりが鳴いている。ひばりが下の方で鳴いている。もう絶對に落ちることのないこの一種の昇天の氣分を、自分ひとりで祝つているのは勿體なくて仕方がない。

野の花よ。なぜもつと早く開こうとしないのだ。蝶よ。わたしのまわりを舞うがいい。

三月十四日。もう繰返すまいと思つていたこの暗い日が、なぜ私をとりまいて悲しませるのだろう。この春は死の容相を見せている。



親切の押賣

愛する人々の幸福をねがうのは當然である。だが自分たちの幸福を棄ててまでこれをねがうべきでない。

ラッセル

N夫人は、多分何かの宗教を信仰している人である。あまりはつきりした宗教ではないらしいが、それでも、信仰を無理にすすめたりなんぞしないからまあいい。そして近所の人はみんな一應は尊敬している。なぜ尊敬しているかといえば、自分のことは、これつぱかりも考えずに、默つて他人のため、公共のために働いているからである。僕もそのうわさをきいて、へえなるほどとは思つた。

うちのすじ向いの家で、奥さんが重病にかかつた時なんか、その子供たちのために、せつせと食事をはこんだり、洗たくをしたり、醫者の使いなんかもすすんでしていた。これだけの親切はなかなか出來るものではないと思う。またある時は、道路工

夫の人たちに、お茶だの、パンだのを運んでいる姿もみた。工夫たちは、ほつかむりやはち巻きをとつて、ぺこぺこして悦んでいた。少なくとも外觀は感謝していた。

恐らくN夫人は、すべての人がこのように、自分をすてて、公のためにつくすようになれば世の中はずつと住みよくなると考えているにちがいない。つまり滅私奉公である。ところがN夫人は、信仰をもつているせいか、文句はいわない代りに、自分の不幸をどうもよろこんでいる様子である。というよりも、自分はいつも慘めでなければ善行がほどこせないと思つているらしい。

これは大變な心得ちがいだと僕は思う。近所の人たちがN夫人を尊敬している氣持には、ちよつと割り切れないところがあるに相違ない。N夫人も幸福になることを考えてくれなくては、結局どんな親切も、全くうれしくは受け取れない。犧牲的精神も、これが看板になると困る。近所の人たちは、どうも内心、N夫人の親切の押賣りをもてあまし、額のかげで八の字をよせているのではないかと思う。

心のかたむき

にくきもの、急ぐ事ある折に、長言する客人。

清少納言

訪ねてくれる人を厄介ものに思うのはいやなものだ。それで僕はあまり人を訪ねない。けれども、そんなことで濟まされないことだつてある。

「出がけに人が來てしまつたものですから……」ああ、この言葉を僕たちはこれからもくりかえし、さまざまの人から聞かねばならない。その時に意地の悪い想像をする。あれは單におくれた口實にすぎないかも知れない。そして實際、來訪者があつたにしても、僕を待たせても、その人としばらくぶりで話をしていた方がたのしかつたのかも知れない。そしてまた……。意地の悪いことを考え始めると、しまいには戀人の抱くような嫉妬までを知らずに味つてしまうようになる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb